

第二十二回がん哲学塾

ニュースレター

発行日：令和元年 11 月 11 日

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター

E-mail: juku_0307@yahoo.co.jp

11 月 2 日(土)MBS 毎日放送にて、ちややまちキャンサーフォーラムが開催されました。
今回は 1 回生～5 回生が参加しました。

ちややまちキャンサーフォーラム 2019 を終えて

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター アクティブラボ
3 回生 神田弥音

今回、ちややまちキャンサーフォーラム第 5 回に初めて参加させていただきました。

私たちはブースで、がん哲学学校、メディカルカフェの案内や活動報告をさせていただきました。遠方の方でもこのメディカルカフェをご存知の方がいらっしや、認知度が広まってきていると感じました。

ブース展示でのお手伝いの合間に乳がんのセミナーを聴きに行きました。ご講演では薬物療法の観点からと、緩和ケアの観点から乳がんとの付き合い方をお話ししてくださいました。

薬物療法に関するご講演では薬理学の授業で習った抗がん剤だけでなく最新の発売前の薬なども教えていただき、改めて医療の日進月歩を感じさせられました。また乳がんには様々なタイプに分かれておりそれぞれに対応した薬を処方する個別化療法が行われていることが印象的でした。一言でがんといってもその種類は多くあり、患者さん一人一人にあった治療を探していくことが大事だと感じました。

緩和ケアに関するご講演ではいかに機能予後の改善が大切かを教えてくださいました。緩和ケアの開始時期は、がんの治療は終わってから、若しくは終末期医療の一環と思っている方が多いですが、実際のところはがんが発見されたときからスタートするそうです。いかに早く痛みに対処するか、それにより将来自立して生活できるかが変わってきます。

自立した生活が送れることはがんだけでなく様々な、疾患において非常に重要な意味をもつそうです。あるデータでは徒歩可能な患者さんは寝たきり患者さんよりもはるかに生命予後がいいというエビデンスがでているそうです。

もちろん長生きするのが全てではありません。個人の人生、生活が実りあるものとなってはじめて生きている価値を見出せる人もいると思います。がんになったからといって生活の大半をがんに向き合う必要はなく、自分のしたいことや楽しみを見つけ、がんは自分の個性としてうまく共存していくことが大事だということを感じました。

ご講演の最後には実際に乳がんを患った方のお話を聞かせていただきました。骨転移もされていたようですが元気でとても明るく前向きな生き方を歩んでおられました。

「病気になってたくさんの素敵な人との出会いもてる。」

とても心に残るお言葉でした。がんになったことで医師、看護師、薬剤師、その他医療スタッフの方や同じがん患者さんなど今までは出会うことなかった人と関わることができました。がんになったからといって悪い面ばかり見るのではなく、日頃の些細なことにも感謝の気持ちを持ち持つことの大切さを教えていただきました。

がんの人も笑顔で生活するために

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター アクティブラボ

1回生 濱部あみ

“激変！？「最新がん医療」～遺伝子？個別化？難しいコトバを理解するために～”という講演を聞かせていただいて、阪大病院の佐藤太郎先生はまず最初に患者さんの口から今後どのように治療していくかなどのお話をしてもらっていました。それを聞いて、医師からの一方的な説明ではないし、患者さんに寄り添っていることが感じられました。もし、自分が病気にかかったらそのような先生に主治医になって欲しいと思いました。また、私の祖母はがんで亡くなっているため、その時と比較して話を聞いていました。祖母の場合、こちら側の意見を伝えると少し機嫌を悪くされてしまったり、なかなか私たち患者側の思うように治療ができていなかった覚えがあります。それは、祖母だけでなく私たち家族にとってもストレスとなっていたように思います。そのように感じている患者さんは世の中にたくさんいると思うので、佐藤太郎先生のような患者さんに寄り添う先生が増えて欲しいとより感じました。そうなれば、最後まで自分らしく生きられる人が増えると思うからです。また、そのような寄り添い方は薬剤師にもできると考えました。医師から処方された薬をただ渡すのではなく、患者さんがしっかり飲みきれるように数を減らすことを考えたり、仕事や学校で飲みにくい時間に薬を飲まないといけない場合もあると思うので、一方的に薬の説明をするのではなく患者さんの普段の生活リズムを聞いて、その人にあった薬の出し方をすべきだと思いました。

次に、原千晶さんが、がんという病気が分かってから目を背け続け、誰にも相談できずにいたことを話していました。確かに、病気から目を背けたくなるだろうし、相談しにくいことだと思いました。しかし、目を背け続けても病気は良くなるしないし、周りの人に伝えないと協力してもらえないため、どんどん自分がしんどくなるだけだと思います。病気と向き合うこと、伝える勇気を持つことを患者さんに持ってほしいと思いました。また、医療人はがんに対する誤解を解いたり、治る病気であるという認知を増やし、がんと伝えても「私にできることがあればするから、なんでも言ってね。」とってもらえる環境を作らないといけないと思います。そのためには、今回のようなイベントを日本の各地で行えると良いと思いました。今回も、東京などの遠方から来られてブースを行なっている方もいらっしやっただので、その人たちの思いが届いて欲しいと思います。

また、緩和ケアとは末期のがん患者さんだけが受けるものではなく、がんによる苦痛を和らげるもののため、がんと宣告された人全員が受けられるという講演もチラシを配りながらですが、少し聞こえてきました。私自身、緩和ケアとは治療がなくなり痛みを和らげることを目的としたものだと思っていました。私のように勘違いしている人は多く、「緩和ケアを受けたらどうですか？」と声をかけると、「私は末期ではないです。」と怒る方がいるとハンドマッサージをしてくれた方もおっしゃっていました。私は緩和ケアの薬剤師さんに憧れて薬剤師を目指したので、ステージ1から末期のがん患者さんを楽にできる薬剤師になりたいと思いました。

また、がん哲学学校のチラシを配っている時に興味を持って話を聞いてくださる方や、「名前は聞いたことがある。」と言ってくれる方がいて、より多くの人に知ってもらえる機会になったと思うので良かったです。私はアクティブラボで一年間しか関われないですが、より多くの人に参加してもらってがんになっても笑顔で生活できる人が増えて欲しいと改めて思いました。

ちややまちキャンサーフォーラムに参加して

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター

4 回生 渡邊理乃

MBS で行われたちややまちキャンサーフォーラム 2019 に参加しました。午前中は出店ブースを回ったり、会場に来られる方々にメディカルカフェのチラシを配ったり、案内をしたりしました。出店ブースのひとつにマシュマロタッチというタッチング技術によるコミュニケーションを体験しました。ハンドマッサージに近いのですが、ツボを押すことやこりをほぐすことが目的ではなく、あたたかく包み込んでくれるようなケア技術で、マシュマロタッチが終わると心がとてもポカポカしました。このケア技術は、患者さんにはもちろんですが、患者さんのご家族や医療関係者どうしにも行えるマッサージだとお話を伺い、円滑にコミュニケーションを行うきっかけにもなると感じました。

午後は、大阪大学の佐藤太郎医師による「最新がん医療」についての講演を聞きました。治療の個別化というテーマで、ひと昔は大腸がんだからこの治療薬、胃がんだからこの治療薬というように、ガイドラインを利用した標準治療が主でしたが、現在はガイドラインは参考にはするが、患者個人に合わせた治療を行うようになってきたそうです。佐藤先生が担当された患者さんのお話がとても印象に残っています。中学 3 年生の受験生のお子さんがいらっしゃる母親ががんになり、治療をしていくのですが、抗がん剤の副作用で子どもに心配をかけたくないというお母さんの強い気持ちにより、本来ならばすぐに抗がん剤や放射線治療を開始するのですが受験が終わるまではがんの進行を遅らすような治療を行なって時間をかせいだそうです。もうひとつの事例は、奥さんががんになった若い夫婦のお話です。若い女性は髪が抜ける副作用があるお薬よりも、髪は抜けないが手足にしびれが出て治療を続けるのが難しくなるお薬を選択するだろうという医師の固定観念があった中で、旦那さんは「妻がどんな姿形になってもいいので、命だけは助けてください」と、髪が抜ける副作用があるお薬を選んだそうです。この話を聞いて、患者さんに寄り添うというのは患者を思って早く治療を行うことや対象者によって副作用の種類を変えて提案するというのではなく、患者さんがどういう風に生きたいか、どんな治療をしていきたいかを考えて、症状に合わせて治療のタイミングやお薬を選ぶことなのだと感じました。しかし、いくら患者さんが治療方法を選択できると言っても、新しい情報が溢れているこの時代に複雑化している面もあると思います。患者さんが、自分にあった最善の治療を選択できるように、将来薬剤師としてエビデンスのある正しい情報を提供したいと感じました。

がん看護専門看護師の梅田恵さんのお話も聞き、疾患や治療薬が増えていく一方で、相談支援員かどの専門の職業も増えてきているそうです。患者さんに安心して頼ってもらえるような布陣を組んでいるので、ひとりで向き合わず小さなことでも声をあげてほしいとおっしゃっていたことがとても心に残りました。私も薬剤師として働くようになったら、薬の専門家として患者さんの声に応えられるように、日々勉強を続けたいと感じました。

ちややまちキャンサーフォーラムは、患者さんが情報を得られる場でもあります。学生としての私も学ぶことの多いフォーラムでした。今私にできる目の前のことひとつずつ頑張っていこうと思います。

ちややまちキャンサーフォーラムに初めて参加してみた

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター アクティブラボ

2 回生 藤原由佳理

私は最初「キャンサーフォーラム」と聞いてどんなものだろうかと考えたとき、がんという病気から学会のような硬い発表会のようなものを想像していました。しかし、実際に行ってみるとそんなことはなく、他でよくあるような感じのイベントみたいでした。各ブースの方々の笑顔がとても素敵でがんの経験をしているとは思えないほど明るい方もいらっしゃいました。私たちの大学はメディカルカフェをテーマに出展させていただき、私はフォーラムに来られた方に11月のカフェの案内をしました。始めは簡潔に説明することが出来ず来場してくださった方に長い時間を取らせてしまったけれど、みんな優しく聞いてくださりました。中でも印象に残った方は普段関西にはいない方です。11月の案内をしたところ、「とてもいきたいのだけれど、用事があったいけなくて…。その次はいつあるの？」と尋ねてくださいました。少し遠い所にお住まいなのでご縁がないのかなと思っていたらまさかの返答で感動しました。このフォーラムをきっかけにもっとたくさんの方にメディカルカフェの存在が知られて全国的に広まればいいなと思いました。このフォーラムで私は「展望！ 「免疫治療薬の可能性」」というセミナーに参加させていただきました。まだ授業で詳しいことを習っていないこともあり薬のターゲットなどの説明を完全に理解することは出来なかったけれど今までの抗がん剤と免疫治療薬がどこが違うかなどを理解することができました。がんといっても罹患部位によって保険適応の薬、適応外の薬と様々で患者さんによってもかかる費用がかなり変わってくるという状況を知り、全てを保険でまかなうことはできないけれど少しでも負担が減るといいなと感じました。患者側からするとがんが転移したときに転移した先の部位が今までかかっていた医者の特長外だったとき医者の態度や言葉から確定的な発言が減ってしまうため不安を感じてしまうといった声もありました。他の病気と違い、がんは全然違う科のところに転移する可能性があるのが難しいと思うけれど違う科が地域の病院でも連携して診察していけたらよりよくなるんじゃないのかなあと感じました。

ちややまちキャンサーフォーラムに参加して

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター

4 回生 恵美良太

今回はMBSが開催する「ちややまちキャンサーフォーラム」というイベントにはじめて参加させていただきました。会場には多くの出店ブースがあり、とても賑わっていました。また、今までテレビの向こう側で見たことある人や人気歌手も来ていてとてもワクワクするような環境でした。

私が受けさせていただいた「最新がん医療」というセミナーでは、大阪大学の佐野太郎先生とがん看護専門専門看護師の梅田恵さんのお話を伺いました。佐藤太郎先生は一般ではこれ以上治療できない患者さんや特殊な意見を持った患者さんの治療をメインで行う先生で色々なお話をお聞きすることができました。

次ページへつづく

特に印象に残ったお話は、大腸がんの若い女性が最適な治療を受けずに子供を産むことを優先したお話と、中学生のお子さんをもつお母さんが子供の入試を考え治療を後伸ばしにしたというお話です。この2つのお話はどちらも自分のことよりも大切なしばら人を優先したというお話で、目の前にすぐにも治療すべき患者がいるのにもかかわらず医師は出来る限り本人の希望に沿って満足できる形で治療を行うというとても難しく、考えさせられるお話でした。自分ならどうするだろうと考えた結果、やはり現在の医療はこのようなやり方があるべき姿だと私は思いました。患者中心のチーム医療において、患者が自分よりも守りたいものがあるなら私たち医療者も身をもって聞いてあげるべきだし、決してこれまでの常識に沿って自分たちの意見を通すということはあるべきではないと思います。私も将来、薬剤師になったら固定観念に縛られず佐藤先生のように患者第一に寄り添える薬剤師になりたいと思いました。

ちややまちキャンサーフォーラムに参加して

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター アクティブラボ
3回生 徳田華歩

私は今回初めて参加させていただきました。ロビーでは多くの患者会やサポート団体の方々が展示をし、私たちも「ガン哲学学校 in 神戸」と題して展示致しました。来られる多くの方々に少しでもメディカルカフェについて知ってもらいたい、興味を持ってほしい、という一心でチラシを配っていたのですが中には「具体的に何をやってるの?」「いつやっているの?」と実際に興味を持っていただけたのを肌で感じる事が出来てとても嬉しかったです。もちろん知っていただくことも大事ですが自分たちも知識を深めていくために他の方々の展示も見っていました。中でも印象的だったのは乳がん患者会「虹の会」です。乳がんを患っている患者さんのサンプルを使い、実際にしこりを自分で押してどこにあるのか確認していたのですが想像以上に硬いことがわかりました。ボランティアグループとして参加している中で乳がん体験を通じてぶつかる様々な不安や疑問、葛藤を抱えているけれど、明るく前向きによりよい乳がん医療を医療従事者と共に作り出していく強い想いをお話をお伺いして感じました。又、展示を見ていると同じ神薬の学生さんにお会いしました。その学生さんは1回生からこの団体に参加しており、がん患者家族が開発したと言われるハンドマッサージを実際に体験させていただきました。とても心地よく心も身体もスッキリ、リラックスできました。医療従事者として患者さんに関わる場面が増えてくると思うのでこの技術を自分の中に吸収し、患者さんの不安や辛さを和らげるリラックス効果としても活用できますし、コミュニケーションの一貫としても活用できるため、1回生からとても素晴らしい活動をしていらっしゃるなと感銘を受けました。展示だけでなくセミナーにも参加し、免疫チェックポイント阻害薬の作用機序や併用、副作用について、そして希少がん経験を価値に変えて社会に活かす貴重で興味深いお話もお聞きし、この一日は大学の講義内では習うことができないより深く、濃密な時間を過ごすことができました。来年も足を運びたいと思います。

ちややまちキャンサーフォーラムに参加して

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター

5 回生 増田悠香

去年に引き続き、今年もちややまちキャンサーフォーラムに参加させていただきました。参加する前から、1日を通してどのような経験をできるか楽しみにしていました。

当日、会場に入ると、去年を上回る出展数にまず驚きました。またありがたいことに、正面出入り口の前に私たちのブースを置いて頂いていたので、去年よりもたくさんの方に私たちの活動を見ていただけたのではないかと思います

午前中はがんゲノム医療についてのセミナーを受けることができました。去年もがんゲノム医療についてのセミナーを受けさせていただいたのですが、2年連続受けることで医療の進歩の流れを体感することが出来ました。とはいえ、内容がそもそも難しく、聞き取った後理解するまでに時間を要しました。前回同様今回も YouTube 等での配信を予定されているようなので、今一度ゆっくり聞き直すことで自分の知識に変えていきたいと思いました。セミナーの後半は質問応対だったのですが、ある質問への回答として「アスピリンや胃薬ががん医療に有効かもしれない。ただしまだ研究段階である。」という内容がとても印象的でした。新薬を開発することが医療の進歩だと思っていたのですが、それだけでなく既存薬の新たな可能性を見つけていくことも医療の進歩になるのだと思いました。

セミナー終了後は私達が出展させていただいているブースの紹介や他団体の出展ブースの見学・体験をさせていただきました。最初に新しい発見をさせていただいたのが、リリチャというチャームです。出展団体が公表された時から何のチャームなのか気になっていたのですが、実際にお話を聞くことでどのような思いから作られたものなのかが分かりました。使わないときのことを考えてかわいいデザインからシックなデザインと様々なバリエーションを用意しており、いろんな場面を想定した作りになっていることも教えていただきました。

次に新しい発見をさせていただいたのが、乳がん触診シミュレータです。実際に乳がんの硬さを体験することが出来ました。自分で触って確認するのに良い時期や確認の仕方、確認する周期も教えていただきました。私だけでなく友人や母親・祖母と共有する事の出来る知識を得ることが出来て良かったです。早期発見・早期治療につなげるためには、まず『知る』ということが大事になってくるとは思いますが、今回のこの経験が将来の健康につながるような気がしました。

去年体験させて頂いたマシュマロタッチを今年も体験させていただきましたのですが、それとは別にハンドマッサージも体験させていただきました。どちらも気持ちよかったです。やはり大きく特徴が違っていました。ハンドマッサージは局所的に圧力をかけて血行を良くしていくのに対して、マシュマロタッチはその名の通りマシュマロをつぶさない程度の圧力で腕から手にかけて撫でていくものでした。若い人にはハンドマッサージも気持ちいいかもしれませんが、高齢の方やあまり強く圧力をかけてはいけない方にはマシュマロタッチが気持ちいいのだろうなと思いました。

次ページへつづく

最後に、ロコモ度の判定をしていただきました。そもそもロコモとはロコモティブシンドロームの略で、移動機能の低下を表します。学校でも習ったことあったのですが、その判定方法がとても興味深かったです。まずできるだけ大股で2歩前を出て、進んだ距離を身長で割るというものでした。次に40cmの高さの台に座り両手を前に組み、どちらか片方の足で立つというものでした。これが難しい人は20cmの高さの台に座り両手を前に組み、両足で立ちます。私は会場でスタッフの方にみてもらいながらやったのですが、家でも挑戦できそうだなと思いました。また何年かたってから挑戦して、再度できるかどうか確認したいですし、両親や祖父母のロコモ度の確認ができるなと思いました。また、以前選択科目にて理学療法学部の方が運動機能の話をしていたのですが、医療とは薬や外科的治療に留まらず、個人の運動機能も深く関係しているのだなと再確認させられました。そのあとにこのロコモの話聞かせていただいたので、とても良い学びになりました。

来年もまた参加して、いろんな知識を吸収したいなと思いました。

乳がんと向き合うとは

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター

4回生 園部愛梨

私は今回ちややまちキャンサーフォーラムに初めて参加しました。参加する前は正直テスト勉強に追われていてここに参加するより勉強していたい、そんな気持ちでいたのに終わった後は来年また絶対来たいと思いました。ここまで私の気持ちを変えさせてくれたのがセミナーのひとつである「再発転移乳がんの最新トピック」に参加したのが大きなきっかけになりました。セミナー中にふと周りを見渡した時、お客さんのほとんどが藁にもすがるといふような思いで必死にメモをとられている方がたくさんおられました。その方たちが実際に乳がんで苦しんでいるのかも実際のところ分かりません。ですが、何かに必死な状態なのは一緒にいた空気感で伝わってきました。

そんな中ゲストの方が「病気は自分の一部として受け止めよう、そして一日一日小さくてもいいことはあると思って生きよう」とおっしゃっていました。この言葉は単純なようで実は難しいことであるように思います。ですが先ほど少し張り詰めた感覚でおられていたお客さんの表情が少し穏やかになった気がしました。病気を治すことに必死になりすぎている患者さんがたくさんおられるというのを聞いて、私は薬学部だから何かいい薬はないのかな、副作用が少ない薬は…とついお薬のことばかりに目を向けてしまいがちだけれども、大事なはその患者さんの心を癒してあげることをもっと大事にしなければいけないなと思いました。

私は乳がんにかかったことがないので、どんな感じなのかあまり想像がつかないのですが、骨転移しやすいがんのため、とにかく初期症状として腰の痛みがあり早期発見、予防をすれば予後は良いが遠隔転移したら今の医療では治せないそうです。明るい未来になればいいなと思いました。

ちやまちキャンサーフォーラムに参加して

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター

5 回生 久野聡子

今回で2回目の参加でした。1回目はゼミに配属させていただいて初めてのイベントであったため終始緊張していましたが、今回は少しリラックスした状態で参加することができました。

午前中は、「ゲノム医療元年」というセミナーを受講させていただきました。昨年と似た内容の部分もありましたが、中でも印象に残ったのが、2019年10月の時点で遺伝子検査パネルの一部が固形がんを対象に保険収載され、保険診療などに用いられ始めているということです。このことをお聞きし、今後さらに全国の医療施設で普及し、一人一人の遺伝子変化に対応した治療選択ができるようになると良いと思いました。

午後からは、様々なブースを回らせていただきました。いくつか印象に残ったブースがありましたが、特に勉強になったのが、乳房のしこりがどのような硬さ・大きさなのか実際にシミュレーターを触って体験できたことです。今まで生きてきてしこりを触る機会は無かったため、思っていたよりも硬く驚きました。しこりの硬さを知っておくことで日頃から自分で触診することができ、乳がんの早期発見に繋がるため、もっと周りの人にも知ってもらいたいと思いました。次に、リリチャというチャームの展示があり、最初使用方法がわからなかったのですが、鞆に付けてもう一つの荷物をかけることで片手で重い荷物を持つことができるとも便利なチャームであると知りました。正直、手術の後遺症であるリンパ浮腫によって重い荷物を片手で持つ事が難しくなるということを実生活で考えたことがなかったため、患者さんが何を求めているのかを考え、商品を開発する姿勢に感動しました。

最後に、今年もマシュマロタッチとPOLAさんのハンドマッサージを体験させていただきました。2つともマッサージという点では同じですが、POLAさんのマッサージは適度な力で筋肉をもみほぐすもので、終わった後指先まで血行が通い、とても温かくなりました。マシュマロタッチは優しく肌をなでながらマッサージをするため、とても人肌の温かさを感じ、全身がぼかぼかするような不思議な感覚に包まれました。マッサージによって患者さんがリラックスした状態で、対面で少しでも本音を話しやすくなると感じました。将来的に私も技術を身につけて、目の前の患者さんに安心してお話していただけるような癒しを提供できるようになりたいと強く思いました。

今回参加して、前回以上に各ブースが活気に溢れていたと思いました。何気なくカフェのチラシをお渡しした方が興味を持ち、申し込みまでしてくださった様子を見て、ブースを出展した意味があったと感じました。これからもこのようなイベントに積極的に参加し、多くの出会いを大切にしていきたいです。

ちややまちキャンサーフォーラムに参加して

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター アクティボラボ

1 回生 西尾萌

私は今回初めてちややまちキャンサーフォーラムに参加しました。ブースには沢山の団体の方々がいらっしゃって、活気のあるイベントでした。がん哲学学校のブースの前で、次回のメディカルカフェのチラシを幅広い年層の来場者にお渡し出来ました。「どんなカフェなの？」と質問されたり、その場でスケジュールを確認されている方々がいらっしゃったのが嬉しかったです。がんの患者さんはもちろん、様々な立場の方にメディカルカフェに参加して頂きたいと思いました。

特に勉強になったブースの一つに、乳がんの女性を支援されている団体があります。乳がんには、30～40代の女性が患う、死亡率が高い病気というイメージを持っていました。しかし、最近では20代の女性も患う病気となっているそうです。私は説明を受けた後、実際にしこりのある乳房のサンプル品を触りました。軽く触ってすぐにしこりがあると分かる部分もあれば、かなり強く押さないと気付かない部分もありました。乳がんの検査が無料になるのは40代からだそうなので、私たちは常日頃から自分でチェックをするよう心掛けないといけないと感じました。また驚くことに、最近の医療のお陰で、初期に発見された乳がんは98%の確率で治るのだそうです。乳がんのイメージががらりと変わりました。

私はアクティボラボでがんという病気について考える機会が出来ました。まだ参加した活動は片手で数える程ですが、がんという病気の印象、闘病されている患者さんの人生の印象が大きく変わってきています。今回はテレビでイベントについて放送されると聞いたので、笑顔で包まれたちややまちキャンサーフォーラムの雰囲気が多く視聴者の目に触れて、がんに対して興味を持つ人が増えたらいいな、と思いました。

顧問：樋野興夫

教頭：沼田千賀子

副塾長：横山郁子

塾生：久野聡子、増田悠香、園部愛梨、恵美良太、渡邊理乃、
新田菜月、神田弥音、北夏実、徳田華歩、竹ノ内涼、
藤原由佳理、濱部あみ、西尾萌、橋本莉那

